

#### (49) 確信的現実主義者・ゲーテ（「或る反時代的人間の偵察行」の49）

ゲーテは「ドイツ的出来事」ではなく、「ヨーロッパ的出来事」である。彼の「自然への回帰」、「ルネッサンスの自然性への上昇」は十八世紀を克服する壮大な試みであり、この世紀からの一種の「自己超克」である。彼は自分のうちに十八世紀の「最強の本能」をもっていった。彼は自分を「生」から切り離すことなく、「生」のなかへ身を置き、怯むことなく、できるかぎり多くのものを自分に引き受けた。彼が望んだのは「全体性」であり、「理性、感性、感情、意志」を分離させることと闘ったのである。

ゲーテは「全体性」へと自分を鍛え上げ、創造した。彼は「非現実的」志向をもつ時代の只中であって「確信的現実主義者」であった。彼は自分と類縁関係にあるすべてのものに対して「然り」を言った。この点で彼にはナポレオンという「最も現実的もの」以上の体験はなかった。彼は、強く高い教養をもち、自制心があり、自分自身を畏敬し、「自然性の全領域と豊饒さ」を自分に恵み、こうした自由に対する十分な「強さ」をもった人間を構想した。すなわち、それは「弱さ」からではなく、「強さ」からの「寛容」な人間である。このような「自由となった精神」は悦びに満ち信頼に値する「運命論」をもち、「全体」において「すべてを救い肯定」し、「否定する」ことはない。これこそ「ディオニュソス」と呼ばれたものである。

#### (50) デカダンスの世紀・十九世紀（「或る反時代的人間の偵察行」の50）

ゲーテが個人として獲得したすべてのものを、或る意味で十九世紀も獲得しようとしてきた。すなわち、それは、「理解、是認における普遍性」、「あらゆるものをあるがままに到来せしめること(ein An-sich-heran-kommen-lassen von Jedwedem)」、「大胆な実在主義」、「すべての事実的なものに対する畏敬」である。ところが、十九世紀のすべての成果はゲーテに遠く及ばず、「混沌」であり、「ニヒリズムの嘆息」であり、「疲労の本能」である。例えば、それは「ロマン主義」、「利他主義」、「超感傷性」、「社会主義」である。こういう意味で十九世紀は「デカダンスの世紀」である。また、ここからするとゲーテは「突発的事件」であり、「美しい無駄(ein schönes Umsonst)」である。「公共の利益」という「貧しい遠近法」から眺める限り、「偉大な人間」は誤解される。しかし、「偉大な人間」から「利益」を引き出せないということこそ、「偉大さ」に属するのである。

#### (51) 最後に（「或る反時代的人間の偵察行」の51）

祖国ドイツ以上にニーチェが拙く読まれるところはない。それにもかかわらず、何のために一体ドイツ語で書くのかとよく問われる。しかし、彼が今日読まれることを望んでいるかどうかすらも分からない。彼の野心は、彼が自分をドイツ第一の大家であると自負する「箴言(der Aphorismus)」、「格言(die Sentenz)」によって、他の誰かが一冊の書物で言うこと、さらには一冊の書物においても言えないことを、十の文章で言うことである。それから、彼は人類に、その「最も深い書物」である『ツアラトウストラ』を与えた言う。そして、さらに近々「独立不羈の書物」を与えるであろうと予告している。